

A. 聖書解釈と政治思想

オリエンテーション

導入：脳神経科学とキリスト教

1. 聖書の政治思想とキリスト教社会主義

- | | |
|------------------------|------|
| 1-1：古代イスラエルと政治—契約・法・王権 | |
| 1-2：イエスの宗教運動 | 5/13 |
| 1-3：パウロとローマ帝国 | 5/20 |
| 1-4：近代社会とキリスト教社会主義 | 5/27 |
| 1-5：宗教社会主義と解放の神学 | 6/3 |

2. 現代政治思想とキリスト教

- | | |
|----------------------|------|
| 2-1：民主主義とキリスト教 | 6/10 |
| 2-2：政治的なもの——アーレント、ムフ | 7/1 |
| 2-3：シュミットからアガンベンへ | 7/8 |
| 2-4：ジジエクとパウロ | 7/15 |

Exkurs

- | | |
|-------------------|----------|
| 現代キリスト教思想とユダヤ的なもの | 6/17, 24 |
| キリスト教と科学技術 | 7/22 |

<前回>導入：脳神経科学とキリスト教

A. 自然神学の最新の動向から**B. 脳神経科学と宗教研究ネットワークの行方**

一 はじめに

1. 宗教研究ネットワークの意義

過度の専門化は研究全般の陳腐化と停滞をまねく恐れがある。

「脳・心・宗教」という問題領域

二 近代以降の思想状況とキリスト教研究

2. 少なくとも、聖書の創造物語を進化論と調和的に解釈することが十分に可能であることは、キリスト教と進化論の対立図式を論じる際に、念頭に置くべき論点である。

3. 宗教研究をめぐる近代の問題状況は、次のようにまとめられるであろう。キリスト教思想研究が直面する問題状況は、宗教とは何か、近代以降の世俗世界に生きる人類にとってなぜなおも宗教なのか、多様に分岐する宗教世界の中のどの宗教なのか、という三つの問いに集約できる、と（芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、一九九四年）。三

「脳・心・宗教」問題圏

(1) 脳科学と宗教——一九八〇年代～二〇〇〇年頃——

4. fMRI (functional magnetic resonance imaging、機能的磁気共鳴画像) を代表とする実験技術の確立。

5. 二〇〇〇年頃までの代表的な脳神経宗教学は、脳と宗教現象（心）との関連が因果的に説明可能であるという前提に基づいている。宗教経験は脳内の自然のプロセスに関係するというそれ自体はおそらく正当な議論が、脳内の自然のプロセスによって「生じる」ものに過ぎない、自然的なプロセスに還元されるという推論を経て、宗教は妄想であるという主張の根拠として解釈されるという議論の流れである。「脳と心」に関わるこのような推論が進化論論争以来の「宗教と科学の対立図式」を規定されていること。

ポイントは、脳の自然的メカニズムとプロセスによる宗教経験の因果的説明が宗教現象

の虚偽性を帰結する点にある。論理的飛躍あるいは論理的誤謬。

6. キリスト教だけでなくすべての宗教が「脳と心」という問題圏を共有している。脳と心という問いが諸宗教において共有され得るものであるならば、適切な問題設定を行うことによって、心をめぐる宗教の比較研究が可能となるかもしれない。さらに、「脳と心」をめぐる宗教間対話も決してあり得ない。

7. fMRI 画像は、実況中継どころか次のような非常に複雑なデータ処理の結果。

結論的には、一九八〇年代から二〇年間くらいの fMRI などによって獲得された脳神経科学の成果はそれなりに興味深いものではあるが、宗教研究の核心的な問題に到達するには至っていない。宗教経験に関して問題になる、たとえば神はいかなる実在であり、われわれの人生とどのような関わりを持っているのかとか、あるいは仏への信心は人間存在にとってどのような意義があるのかといった問いを論究することからは、はるかに隔たっている。

(2) 社会脳と宗教

8. 社会脳研究：リスペクト——「人が人に与える、母子関係に源を持つような無条件な存在肯定」(208)——の問題。リスペクトあるいは愛は、脳神経科学とキリスト教思想との実りある対論が可能なテーマとなり得る。

9. ブーバー：〈我—汝〉の相互性は、愛の共同性の基盤と考えることができる。「愛は〈われとなんじ〉の〈間〉にある」のである。

人間が関係存在であるというこの理解は、社会脳とは「関係構造の変化に応じて、わたしたちのふるまいを適応的にコントロールしている脳のしくみ」(169)である、という仕方社会脳研究において提示されているものに対応している。

四 むすび

10. ネットワークを具体化し深化させるために。かなり強力な理論的な基盤構築が必要。自然科学研究の急速な進展を念頭におきつつ宗教研究ネットワーク——宗教研究の内部と外部の双方に広がる——の新たな構築を試みる際に必要となるのは、宗教と科学の関係性をめぐる哲学的思索である。

宗教哲学とは、本来「宗教研究の科学性の解明」といった役割を担う学問分野であると考えており、言語をめぐる問題領域を中心に考察を進めつつある（芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、二〇〇七年、など）。

11. 自然神学の再構築——啓蒙主義的な普遍的な合理性から伝統特殊な普遍性・合理性へ——の動き。本来の意味における自然神学に戻るならば、それは宗教と科学の関係論の基礎を論じる宗教哲学として位置づけ直すことができる。しかも、この自然神学（＝宗教哲学）の思索が諸宗教相互の関係論をも視野に入れたものとなり得ること。

宗教と科学という問題領域が、宗教哲学的思索を理論的基盤にして、多元的な宗教的状况の議論に接続されるとき、ここに、ネットワークとして宗教研究の一つの可能性を展望することが可能になる。

1. 聖書の政治思想

1-1: 古代イスラエルと政治——契約・法・王権

(1) 契約思想の源流と類型

・ M.ノート 『イスラエル史』日本基督教団出版局。

・ 船水衛司「契約」『聖書学講座 第二巻』日本基督教団出版局、27～66頁。

1. 古代オリエントにおける契約思想

- ・マリ文書(Mari-text)：紀元前約 1800 年頃（か、やや後）、ユーフラテス川中流の古代都市マリ（アブル・ケマル）の近くのテル・ハリリの王の記録集。法律のテキスト、経済のテキスト、王の外交文書。

「ヘブライ人」という名称の人々が古代オリエント全体にいた。バビル。いろいろな種類の労役を引き受けていた。「これは多分、特定の法的・社会的地位に対する一定の名称である」（ノート、58頁）。

- ・ヒッタイトの契約文書（紀元前 1400-1200）、モーセ時代
宗主と隷属民の契約（宗主－属王）
- ・「契約は古代オリエントの社会生活の基盤」（石田友雄『ユダヤ教史』山川出版社、21頁）

2. 「日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。」（創世記 15:17）

3. 契約の種類

- ・アブラハム系列：「神が責任を負う」

アブラハム契約、ダビデ契約（サムエル下 23.5、3.9、詩編 89.28-29）、ノア契約、創世記 15 章：

1 これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」

5 主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」6 アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。・・・

17 日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。18 その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える。エジプトの川から大河ユーフラテスに至るまで、

- ・モーセ系列：「イスラエルが責任を負う」

シナイ契約・十戒、ヨシュアの契約（ヨシュア 24）

・この二つの契約の統合としての「イスラエル」：「神は、更に続けてモーセに命じられた。「イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされた。これこそ、とこしえにわたしの名／これこそ、世々にわたしの呼び名。」（3.15）

（2）契約思想とその射程

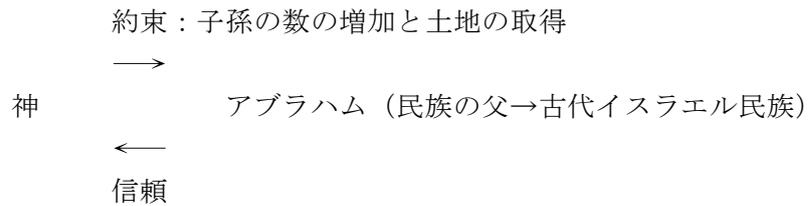
4. 「神－人間（共同体・民族→個人）」の関係＝契約関係、人格関係における神（人格神）

- ・契約から創造へ：契約をめぐる思想は、旧約聖書の思想的核心を構成するものであり、創造論も契約思想に基づくものとして解釈することができる（フォン・ラートの学説。G・フォン・ラート 『旧約聖書神学 I・II』日本基督教団出版局）。

旧約聖書の記述の順序で言えば、創造から契約へと物語は展開しているが、思想形成の順序では、契約から創造への展開を指摘することができる（聖書学の成果）。

5. 契約の構造：「約束－信頼」 → 責任性・違反への罰則・人格的な関係

アブラハムと神（主＝ヤハウェ）との契約（アブラハム契約）は、旧約聖書の契約思想の原型と言えるものであるが、それは次のような構造になっている。



・古代イスラエル宗教は典型的な民族宗教である。

神は民族の反映を約束し、民族はこの神への信頼において統一される。神と人間との契約関係は、人間相互の関係の基本型であって、契約は古代イスラエルの基盤をなす。

・十戒（出エジプト 20.1-17）→「契約の書」（20-23）

宗教法（神と人間）から一般法（人間相互）へ

偶像の禁止・祭壇建設の規定：20.23-26

奴隸法：21.1-11

死刑法：21.12-17

傷害法：21.18-36

財産法：22.1-17

社会法：22.21-27

訴訟法：23.1-9

安息年・日、三度の祭りの規定（23.10-19）

・「イスラエルの民を互いに結び合わせている絆は、神がご自身をイスラエルに結び合わせているのと同じ絆だった」、「そのような兄弟姉妹どうしの契約は、イスラエル全体が神が結んだ契約関係に基礎づけられていたのである」（トーランス、38）

・旧約聖書における契約の意義＝共同体の形成原理

6. 契約：法から精神へ

・法の実体的基盤が喪失するときどうなるか。→ 実体変化

エレミアの新しい契約（31.31）、「心にそれを記す」（31.33）

・並木浩一「ヨブ記における契約——創造と救済」（『並木浩一著作集1 ヨブ記の全体像』日本キリスト教団出版局、2013年、260-271頁）

「筆者は契約を、神によって選ばれた民が歴史形成に参加する責任を自覚する源泉として理解する。この源泉は、それが枯渇して初めて民を愛する人々にその存在を気付かせる」（260-261）、「預言者たちは民のあり方の源泉を民族の創造期に求めた。その時に神と民との間に特別の関係が神の一方的な恵みによって樹立されたと確信した。民は神との交わりに招き入れられた。その関係をわれわれは契約と受け止める」（261）

「契約の民は武勇によってではなく、日常的に正義を行うあり方によって歴史を形成する。具体的に言えば、神の民にふさわしい社会は、人々が居住する町（実際には富裕層の発言力が強い王国時代の未熟な都市的共同体）で、社会正義を守る法的な自治によって維持される。イスラエルでは王権が各地域の司法権を掌握できなかった。それぞれの町は王国時代には司法権を持つ自治団体であった」（262）「ところが都市的精神が意味を持ち始めるべき時期、すなわち経済活動がようやく活発になった前八世紀に入ると、富者による都市支配が急速に進み、小農民は没落して自由民の権利を失った。それとともに自治と正義の精神は崩壊した」（262）、「すべての人々が申命記の民族観と祭司の指導体制を良しとしたわけではない」、「この時代にもなお、古い自律的な共同体における契約団体の伝統を大事にして兄弟盟約の精神に生きる道を捨てなかった少数の知識人がいた。彼らは祭司の指導を最小限度に押さえて、可能な限り市民の自律性を理念として保持しようと模索した人々

である。ヨブ記作者はその一人であったと考えられる。」(264)、「ヨブは東方の異邦の民の一員として虚構的に想定されているにもかかわらず、神が樹立した彼との契約関係への固着は、彼がヤハウエ神とイスラエルとの関わりを知る信徒であることを物語る。」(265)

7. ノア契約：創世記9章

9 「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。10 あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。

<契約・経済と政治、アメリカ合衆国>

Richard A. Horsley, Covenant Economics. A Biblical Vision of Justice for All,

Westminster/John Knox Press, 2009.

Introduction: "All People Are Endowed by Their Creator ..."

Many Americans understand themselves as a biblical people. Historically politicians as well as preachers have boldly claimed that the United States is God's New Israel, a chosen people with a destiny to embody "justice and liberty for all."

new covenant communities (ix)

the Constitution of the United States, the foundation of the people's self-government, was understood as a new Covenant.

The Constitution, like the Covenant, is focused on the protection of people's rights, as articulated explicitly in the first ten amendments, usually called the Bill of Rights.

law as derived ultimately from a higher source, God or Nature. In Jefferson's terms, law is ultimately the "law of nature and of nature's God."

While declaring that all people are "endowed by their Creator with certain unalienable Rights," they systematically denied the rights and the very humanity of the Africans whom they enslaved. Attended by the inconsistency and hypocrisy involved in its adaptation to North American democracy, the Covenant continued to play a prominent role in political life. (x)

the Constitution was finally amended to extend civil rights to the descendants of former slaves and to extend the franchise to women.

In the 1770s and 1780s the driving concern was to assert independence from the English monarchy and to establish self-government. Political rights were again the principal concern

The biblical Covenant, however, like the exodus with which it is linked, is focused as much on economic rights as on political rights. The hard bondage under Pharaoh in Egypt that the Hebrews escaped in the exodus was not only political subjugation but economic oppression. (xi)

This ideology of freedom as pursuit of self-interest reinforced and shaped the strong sense of individualism in U.S. society. The ideology of individual self-interests gave license to entrepreneurs in nascent capitalist enterprises.

The marriage of capitalist corporations with industrialization and international trade brought about a complete transformation of the economy in the United States

Workers became dependent on the owners and management. Fewer and fewer people came to own and control more and more of the wealth and resources.

Capitalism, which requires an economic return on capital invested, thus became the economic system, with no effective challenge and little serious criticism. (xii)

economic concerns run throughout the Bible.

Economic concerns are central also in the teachings of Jesus. The petitions of the Lord's Prayer focus on enough food to eat each day and the cancellation of debts. (xvi)

Despite the prominence of economic issues throughout the Bible, the field of biblical studies has generally neglected economics. In recent years, however, a few scholars have given special attention to the economic system assumed in biblical books and/or to economic concerns evident in particular texts.

investigation of the political-economic context in which Jesus and his movement emerged has enabled us to hear previously undetected economic implications in his teachings.- 6 -

Drawing on these recent studies we can formulate a provisional picture of the economic structures and dynamics in which the ancient Israelites lived and we can gain a sense of the economic concerns of the prophets and of Jesus and the Gospels. (xvii)

(2) 契約神学から三位一体論へ

8. キリスト教思想における契約、特にカルヴィニズムの契約神学あるいは倫理思想
改革派の契約神学

9. 出村彰「コクツェーユスの契約神学」(出村彰『ツヴィングリ 改革派教会の遺産と負債』新教出版社、2010年、pp. 127-168)

「近年来、神学あるいは神学史の研究者の間で、「契約」(Bund/covenant)に対する新しい関心が高まっているように思われる」、「歴史神学の分野でも、いわゆる分派型の再洗礼派神学を、契約神学に基づいて解釈しようとする努力がなされている。さらに、ニューイングランドを含めて、ピューリタン神学の顕著な特性を「契約」思想に求めることは、ほとんど常識の域に近いと言ってもよいだろう。」(127)

「「契約神学者」として知られてきたヨハネス・コクツェーユス (Johannes Cocejus [Coch] 1603-1669) の神学体系をあるがままに紹介し、契約神学の一つの典型を提示すること」「日本では依然として、名前のみの存在に留まっている懸念」(128)

『契約論』 *Summa Doctrinae de Foedere et Testamento Dei*, 1648.

10. バルト神学

大崎節郎「バルト神学における契約と法」(大崎節郎『恩寵と類比——バルト神学の諸問題』新教出版社、1992年、pp. 244-256)

「カール・バルト」「契約概念」の単純な復興ではなく、むしろ、特別に強固に聖書に立脚せんと努めたことの結果」(245)

「『ローマ書』においては未だ覆われていたバルト神学の核心は、やがて著者の学的反省とともに顕わになって行く。『教会教義学』は、イエス・キリストにおける契約の神の存在と行為に対する信仰の言葉であると言っても、いっこうに差し支えない。」

「啓示の主体たる三位一体的存在」、「神が契約の神であることの根拠が神ご自身の存在の内に存すること」(247)

「カール・バルトの予定論は、一方においては、神が自由な愛に基づく永遠の意志決定において、ご自身を「契約の神」として規定されたこと (Gottes Selbstbestimmung zum Bundesgott) を語るものである。「わたしはあなたがたの神になる」という神の決断を語るものと言っても同様である。神の永遠の自由な恩寵の選びにおいて、神は契約の神である。したがって、バルトによれば、神と人間との契約は「恩寵の契約」(Gnadembund) であって、それ以外ではない。」(248)

「バルトはかつての「契約神学」に対して最も強く批判的にならざるを得なかった。バルトの見るところでは、かつての「契約神学」が「恩寵の契約」よりも「業の契約」をもって基準のごとく考えたのも、結局は、契約の真理と現実を徹底的にイエス・キリストにおいて捉えなかったことに起因する。」(249)

11. モルトマンのバルト批判

Trinitarische Monarchie (Jürgen Moltmann, *Trinität und Reich Gottes*, 1980, S.154-161.)

Karl Barths Theologie ist hier eine theologische Souveränitätslehre: Der innertrinitarischen Ordnung des herrschenden Vaters und des gehorsamen Sohnes entspricht die extratrinitarische Ordnung der Gottesherrschaft über die Welt. Dieser Ordnung entspricht das Verhältnis des Himmels zur Erde in der Kosmologie, das Verhältnis der Seele zum Körper in der Psychologie und das Verhältnis von Mann und Frau in der Anthropologie, um nur die Entsprechungsverhältnisse in der Schöpfungslehre zu nennen. (Jürgen Moltmann, *Gott in der Schöpfung*, 1985, S.258)

バルトにおける古代以来の形而上学的伝統における観念論的な残滓。十分に聖書的ではない。

↓

(3) 聖書学と組織神学との関係

大木英夫『組織神学序説——プロレゴメナとしての聖書論』教文館、2003年。

「第七章 契約論的組織」

はじめに——現代の組織神学における契約神学の伝統の回復について

- 1 旧新約聖書の「契約」的統合
- 2 二十世紀における契約神学の発見
- 3 組織神学としての契約神学

I 契約神学の源流

- 1 アメシウスの契約神学
 - (1)アメシウスの「神学」の理解 (2)契約神学の本質と問題
- 2 証言の原関係の契約論的構造化
 - (1)原関係のゲシュタルトとしての契約 (2)契約神学的ゲシュタルトウンク

II 現代社会からの要請としての契約神学

- 1 契約原理
 - (1)「人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果」
 - (2)契約化としての近代化——日本国憲法
- 2 契約社会からの要請としての契約神学
 - (1)新しい「現実」の発生——契約社会 (2)新しい「ことば」の必要

III 現代の組織神学の根源語

- 1 神学の根源語——「十字架のことば」としての「新しい契約」
- 2 最後にくり返して〈原関係〉——垂直次元と水平次元の交叉

付論 聖書学と組織神学——左近聖書学の神学的軌跡